

最後になりましたが、平成四年から、株式会社佐藤組に嘱託として入社し、用地業務に今も敏腕を振るっておられることを書き添えておきます。

(島根県 星野 誠一)

シベリア抑留記

広島県 原 修 三

私は大正四(一九一五)年生まれで、現在既に八十七歳である。兵歴は昭和十(一九三五)年徴集で甲種合格となり、昭和十一年一月、福山歩兵第四一連隊に入営、昭和十二年七月九日帰休除隊の予定のところ、当日の午前五時、突如週番七官集合のラッパがあり、本日の除隊者は集合、本日の除隊者の除隊は一時中止となる。そのことは既にご存じのように、当年七月七日の蘆溝橋事件により京都以西の各部隊の帰休除隊は中止となる。既に近郊の町村からは除隊出迎えの代表者が「祝

除隊」の旗をかざして営門前に集まっており、私のように遠い所でも役場の兵事掛と身内の代表が出向いていた。面会不可能ということで、なす術はなく落胆の極に達した。

しかし事態は刻々と進行し、応急動員から本動員となり、動員計画により応召、戦時態勢の部隊編成となり、同年八月一日には字品を出港、釜山經由により日中戦争に入る。私は伍長勤務上等兵で小隊の第六分隊長として参戦。同年八月七日、長城線の八達嶺が初戦場で、約一週間、長城線の警備に就く。以降、北京を通過、徐州、徐州へと毎日十キロの強行軍で疲労はその極に達す。正定まで進行、大休止となり、入浴もあり久々に手足を伸ばし休養した時既に九月初め、思いもよらぬ変化到来、部隊は速やかに天津に集結の命下る。補充部隊到着もあり、我々の歩兵四一連隊に山砲部隊の旅団編成となり、九月中旬天津を出港、南方に向け発進、左右を護衛艦に守られて前進。我々下級者には何のためにどこへ行くのか分から

ぬが、十一月三日明治節に杭州湾に敵前上陸の計画であったということであり、その一週間前から中隊長級の集合が毎日のようにあり、中隊においては各分隊長以上毎夜、上陸の要領、注意事項等の作戦会議の連続であった。

上陸当日、敵は満潮時を目標に射撃の照準を合わせていたようだが、我が軍は干潮時に上陸することになっていた。時間的には早朝の五時頃であったと思うが、干潮のために兵器を頭上に胸まで浸る海中を前進、弾は満潮時の照準で頭上高く飛来、海軍の艦砲援護射撃と相まって大した犠牲者もなく上陸に成功。上陸地帯は官舎街らしく同様の住宅が並び、家屋にはクリーニングされたシャツや洋服があり清潔なものだった。よってそこに宿営し、一週間ほど付近の警備と休養を兼ねた駐屯だった。それからは南京攻撃を目標に交戦行進というか、正規軍との交戦はあまりなく、便衣隊というか土民兵か、我が軍の状態によっては何をするか分からぬ存在であり、交戦と食糧も求めな

がらの前進前進の毎日であった。揚子江（長江）の沿線で無数のクリークがあり、点在する舟中に鴨や鶏卵が隠されている場合もあった。

南京も近くなった十二月下旬、揚子江を渡江する渡江点は南京より下流三キロの地点、江幅一キロメートルで、上陸用舟艇で渡河し、左岸を南京、対岸木甫へ敗残兵の退路撃滅を目的に進攻する。しかし南京は既に他の部隊の進攻占領の情報に接するも、十二月三十一日まで任務を続行。昭和十三年一月一日南京に進攻。今話題になっている南京大虐殺も、我々は裏門からの入場であり、その点に若干の関係ありやとも思えるが、そのようなことは感じ得なかったことを実地体験者として記述するものである。

南京に一週間駐留、揚子江を下り上海に至る。上海には二週間程駐留し、海上輸送により青島の進攻。時既に十三年二月十一日、約三カ月、付近の警備に従事す。五月初旬同地出発、錦州攻略後、新設部隊要員として内地帰還の命を受け、青

島より宇品に上陸、福山歩兵四一連隊補充隊に到着、歩兵第七一連隊に転属となる。同部隊は福山で第一大隊、浜田で第二、広島で第三大隊を編成し、昭和十三年八月宇品を出港し、大連經由でハルビンに入り関東軍の指揮下に入る。

昭和十四年一月、興安北省ハイラルに至る。嚴寒零下三〇度の不健康地帯において訓練に尽力す。同年六月から九月に至るノモンハン事件に参戦。同事件の様相は、兵器において、新旧の強度において肉弾と鉄との戦であり、今にして思えば勝敗は歴然たるものがあり、その状況で我が連隊は八月末、最早これまでと軍旗を奉焼し連隊長以下全員、戦車群に突入、戦死されたのである。

かかる戦況にもかかわらずソ連は九月初め、我が軍と講和条約を結び不可侵条約にも応じたのである。そのことは、本国においてはナチス攻防、シベリアにおいては日本との両面作戦に対する工作であることは言うまでもないが、終戦間際の満州への侵攻は一方的にこの不可侵条約の無視であ

り、国際条約の違反である。かかる行為は、これから以後のことであるが、一応この機会に記述しておきたいと思うのである。これからは、ハイラルより逐次免渡河に転進、同付近の陣地構築と共に訓練に専念。

昭和十九年八月機動部隊転属の情報に接し、これに同意し公主嶺に向。部隊が新設であり、当地において部隊の編成と思いきや、当部隊は関東軍直属の機動部隊で、機動第三連隊と称しソ連対象の忍者部隊であり、想定していた任務の相違を痛感したのである。

前任の歩兵第七一連隊は十九年九月フィリピンに転進、全滅に等しい損害を受けたようである。私は機動部隊転属時は既に准尉に任官しており、新任の准尉に人事掛を渡し、二年兵以上の教官として訓練に没頭する。

昭和二十年七月中旬教育隊に入隊、将校教育に専念中、同年八月九日ソ連軍の満州侵攻により教育断念。八月十二日、部隊駐屯地の公主嶺に到

着。既に連隊は出征しており、部隊の家族、私の妻も帰国列車対応がなかったのか、または乗り遅れたか官舎に居座っていた。これは大変と輸送機関と連絡し、我々の本隊追求列車と家族の帰国列車を工面し、八月十四日、我々は北へ、家族は南へと別れた。日常生活物資は両者共に持てるだけを持ったものの、ほとんどは官舎に置き去りであったのである。家族列車は朝鮮において拿捕されたようで、一年間朝鮮で暮らしたようである。

これは私が帰国後、妻に尋ねたのであるが、我々が考える家庭の下女働きのようなものであり、異国での一年は大変屈辱であり身体的にも苦労だったようで、具体的には深く聞くことは差し控えたのである。

さて我々本隊追求の状況であるが、追求中八月十五日を過ぎた頃、日本軍は連合軍に対し無条件降伏で最早戦争は終結（戦）との情報がどこからともなく入手されたのである。追求列車は機関車と貨車一両連結だったと思う。私達准尉、曹長

七、八人と列車運転の工兵、若手将校五、六人いたと思うが、今後の行動についていろんな口論があった。軍人として個人の生死・安全の問題として騒然たるものがあり、結局はこのまま朝鮮に逃亡か、間島駅で下車し部隊に合流するかの二点であることは当然である。列車には日本軍の指揮官が乗車しており、既にソ連軍は朝鮮へ侵攻しており朝鮮において拿捕されることは間違いない、そのことがかえって危険であると諭され、間島駅で下車し各々所属隊に合流する。私は、連隊本部が間島の下士官候補者隊兵舎にあり、所属について指揮を受け本部所属で勤務することになり、炊事業務を担当することとなる。しかし厨房業務については軍歴十年の間全然未経験であり大変だった。こうした状況下においてソ連の抑留業務は着々と進行しており、一般部隊は本部を中心にその周辺のテント張り兵舎に起居しており、その間ソ連は、日本軍の協力の下、日本軍の編成区分に従い分隊・小隊・中隊に編成し、名称も付してい

たようであり命令下達を容易にしたようである。

昭和二十年九月二日をもって日本軍はソ連の抑留者となり次々にソ連に連行されたようであり、その実態はテント兵舎の撤収がその事実を物語っている。我々もいずればソ連に連行されるものと思わざるを得ず、その準備が大変だった。まず所持品の入れ物作りであるが、針はなんとか工面できたがその材料の糸である。これは藁蒲団を切り裂いて糸を取りリユックサククの本体とし、何とか作製した。こうした居住の中へソ連兵が入って来るのであるが、その目的は日用品の略奪である。まず一番目に腕時計、万年筆、石鹸、タオル等、何でもござれである。話によると、このとき満州に侵攻したソ連兵は囚人兵が多いとかで非常に質が悪くということであり、見つける者、隠す者との攻防であり、困難なことであった。

こうした在満中の抑留生活の中、大変敗戦という屈辱と悲哀を感じたことであるが、辺境部隊の家族であろうか、子供、乳幼児連れの家族が次々

とトラックで輸送されて我々の兵舎内の別棟に収容されており、それにソ連兵が乱入し婦女子の泣き声、悲鳴が聞こえても何もすることができない。なおまた乳幼児が栄養失調のため死亡されるようであり、その墓標が屯所の西方の小高い斜面の麓に建てられるのを見るも何もできない。無力と当時の異常な心理状態の中で諦めたとは思うものの、今思えば痛恨の涙禁じ得ず。「人権、人道」の文言はなかったのだろうか、ただ火事場泥棒的に侵攻し、ほとんど交戦することなく莫大な生活物資を略奪し、なおまたかかる虐待行為はいかに検証すべきであろうか。我々の関心、誰が知るべきであろうか。

かかる悶々の日は進行し、十二月も近くなる。軍、師、旅団、司令部、連隊本部要員のほとんどが将校で、その数約三千人、これが満州の戦後の残留部隊であり、私もその一員として同行することとなるが、いよいよ十二月一日間島を出発、三日の行軍でハバロフスク周辺に到着。既に我々の

輸送列車は到着しており、列車内を二段と下段に暖炉を置き、貨車の周辺を毛布で囲み寢床にも布を敷く等措置し、十二月五日ハバロフスク駅を出発。当然臨時列車であり運行実情は全然不明、思いもよらぬ時に発車し停車する等、もし乗り遅れでもすれば大変であり、車外での生理用足し等に慎重を要したものである。

停車中は特に警戒兵はよく列車を見回るが、片言に、お前らはウラジオストックから日本へダモイ（帰ると言うこと）であると言うも、ウラジオストックどころか列車は西に向かつて走り、チタを過ぎれば北に向かいウラル山脈を通過し、いよいよ欧州領に至り、モスクワまで六〇キロの地点のタンポフという小さな駅で下車。当地に設置された収容所に到着。これまで所持することを認められていた軍刀を収容所前で没収したのである。時、昭和二十一年一月五日で、ハバロフスクを出発してちょうど三十日、シベリア鉄道の輸送生活であった。

いよいよこれからがソ連の抑留生活の始まりである。食事は黒パンとカーシャ（粥のこと）、炊事場から配給されるパンの量は労働区分によって変わっていたようで、朝食のとき一日中のものが支給され、カーシャは三食、朝昼晩に配達されていた。その他生活に必要なものは皆で調達するのが本則であるという。時、厳寒の一月で零下三〇度であり、たちまち炊事用及び暖炉用の薪集めが必要で、毎朝山へ薪取り作業であるが、警備兵の人員点検、すなわち人員数の確認であるがこれが大変。四列に並び何番目で何人かになかなか手間取り、寒空に立ち往生、一時間位費やすことはしょっちゅうであり大変だった。山に行き枝木を束ね持ち帰ることが日課である。

こうした毎日が一月くらい経過した時、森林伐採要員の募集があり、これに応募した人員は二十人で、通訳と警戒兵一人の班で班長は少佐だった。本隊と別れて山中の小屋で、作業は夏伐採された木の枝で雪に埋もれているものを取り出して

焼却するのであるが、湿っており燃えないので大変だった。春、夏になり、作業も順調に進む八月終わり頃からソ連人の伐採者が木材の切出しを始めた。我々の班も編成替えとなり人員も大幅増員となった。枝や雑木の整理と、幹木をトラックまでの運搬である。これが年末まで、冬になれば焼却である。

昭和二十二年四月下山し、本隊に合流してエラブカ収容所に移動す。この収容所はオランダの捕虜の将校を銃殺に処したとの話があり、我々もその後釜ではないかとの話もあったが、案に反して収容所所長は婦人で日本語の達者な美しい人だった。私はそこでも森林業務に就く。しかしこの作業は幹木をそりで集積場に運搬するのである。急坂のそり道を登る時はそりをひっぱり上げるので苦労だが、下る時はそりに幹木を積みその上に乗って降りるのであり、五人組で実施する。午前午後一回ずつ実施するのが日課で、八月まで従事した。九月から樽桶作りの作業を実施することに

なり、その工場に務めることとなる。工場といっても収容所内にあるので、朝八時に行き午後五時に宿舎に帰るのである。工場には指導者が一人おり、見習いが新田四人であった。水桶や物入れで、作業は道具の使用方法、木拵えから組立の順である。初めての仕事で、いろいろためになつた。

十二月に入り、カザン州の首都カザンの収容所に移動した。ここの収容所は何かの工場の空舎だったようで、広大で立派なものだった。部隊は皆が将校で、北は北海道から南は鹿児島に至る日本中の集まりであり、私達は広島県人会を作り時々集まっていた。竹原の人も六人いたが今は私一人となった。ここでは工場及び建設現場の作業で、作業への交通はトラックであった。一組大体十人程度で、迎者が人数を承知し、それによって作業場へ行くのである。作業が定まった所には同じ人が都合がよいのでそのように配置していた。毎日八時に出発し午後五時に作業を終わりに帰る。

宿舎に入ると、まず席に着くのがマージャンの四人であり、それに外れたのが碁、将棋、花札等娯楽の取り合いで、そのほかは地方の自慢料理に花を咲かせて空腹を紛らしていたものであり、将来に対する期待感のない無為な心境であった。

昭和二十三年正月を迎え思わぬことがあった。

夕食の時、正月を祝うことだったのか、ビールが飯盒の掛蓋に一杯振る舞われたのである。これは抑留中ただ一回であったと共に、手紙の差し出しが認められたのである。親里に対し一通が許されたのである。ソ連の点検を受けるのでよく注意するようにとのことであり、父母の体の具合と共に私も元気ということ、しかし帰国については不明であり、特に妻に対しては、私のことは考えないで身の振り方については自由にしてくれるようにと書いたのである。国からは一回だけ交信があり、安心すると共に、これは帰国の前触れではないかと希望を抱かせたものである。

この收容所が何かの工場であったのではと言っ

たが、貨車の引込線があり、時にはにわか引つ張り出されてセメントや石炭のバラスを袋に入れて積み降ろし作業をやらされることもあり、それが大抵夜中にあり日中の作業を加減することはないのである。特にセメントの場合は埃がいつぱいたちこめ大変である。時はまだ寒かったので、三月初め頃から一定建築現場での作業となるセメントブロックの積載による家屋の構築であるが、コンクリートの作成に石灰水によりセメントを混合させていたが、これが凍結の予防効果になるのかと思つたのである。屋根の作業にしても、日本の大工のように計画的なことではなく目算に目八分作業で、驚いたものである。

工場における様子であるが、五時の作業終了前になると労働者達が作業物資の余り物などを工場を囲う壁の底辺に置いて外から取れるようにしておき、終了後、衛門を出てから取り出し持ち帰るか、バザールで売る物になるようだ。それと、労働者の身分によりその行為に相違があったよう

あり、これも労働者同士の利得行為であるようだった。こうしたカザン収容所での作業も春と共に晴々とした空気もただよい、若い見習士官出身者の間には歌の練習やこれに合わせてダンスのグループも生まれ、また日本での野球の選手もいたようで、日曜日に広い球場で野球の試合もやっていたのである。

いよいよ六月二十日頃だったと記憶するが、はつきり帰国の旅立ちであることも暗に想像できる状況の中でナホトカに向け出発となる。来るときは一カ月を要した行程も今度は五日間でナホトカに到着。その行程において、共産思想に洗脳された人達が車内に乱入する様子で乗り込み、お前らはまた軍、警察官として行動するのであろうと怒鳴りながら私らに乱暴を仕掛けるような一場面もあった。ナホトカに到着後は所持品及び身体の検査、抑留時代の所感に対する言動については、誰が言うとはなく、帰国船に乗るまではソ連の感情を損なうことのないようにとの注意を各々が心

得ていたようである。各自が所持品の整理をしたようで、海辺にいろんなものが散乱していたことを思い出すのである。またこれはどうなったであろうかと思うことだが、中隊の二年兵で優秀な伍長勤務上等兵で群馬県の人だと思うが、ナホトカで突然出会ったのである。私が今度国に帰る人だと思ひ話をする、彼は、私はしばらくソ連にいるようにしたというのである。共産思想の洗脳を受けたものと思ひ、身体を大事にするようにと言動を変えたのであるが、びっくりしたのである。

いよいよ六月三十日午後、帰国船興安丸に乗船、六時出港、皆んな抱き合って喜んだのである。船中で抑留時の関係で物騒な話もあったようであるが、我々の周辺には影響なく、七月一日十時頃舞鶴に上陸す。帰国諸手続きを済ませ、翌二日に帰還専用の臨時列車により帰省したが、各駅には婦人会の人々が親切に出迎えており、感謝した。七月四日だったと記憶する。

十時頃竹原駅に到着、バスに乗り故郷田万里に

到着した。隣の石原さんの息子さんと甥の敬三が出迎えてくれた。家で父母と妻が涙ながらに迎えてくれ、生来の念願であった帰宅を果たしたのである。父は八十三歳、母七十五歳で老人ながら元気で、ありがたいことに、長男の誕生餅を背負い歩くのを見て八十六歳で死亡したことが今でも一番よかったと思っている。損得は別問題であるが、社会的に、経済面については問題点の多かったことは言うまでもないが、これまで多くの友を失い生き長らえている我が身を思う時、今さらながらただ感謝するのみであります。

シベリア回想五人の兵

山口県 長野 安 廣

大正十三（一九二四）年生まれの私達が徴兵検査に合格し、山口四二連隊に入営したのが昭和十九（一九四四）年十二月十日だった。当時日本は

南も北も八方塞がり、遠からず手を上げるだろうという寸前だった。

私は、昭和十六年三月より陸軍御用船桐葉丸三三〇〇トンに乗船、南はラバウル、北は占守島まで行ったり来たり。学歴のない私にでも日本のこれから辿るであろう末路はおぼろげながら推測できた。それは敗戦だった。昔から、勝てば官軍、負ければ賊軍という言葉の通り、喧嘩の相場は決まっていた。時の要人達は知り抜いていた事実だったろうに、引くに引けなかったのだろうか。

さて話は元に戻る。山口に入営後十日目、明朝頃出発らしいと前夜、点呼の週番将校が言った。

「長野はおるか」「ハイ自分であります」、呼ばれて近寄ると、小声で「お前のお袋が馬小屋のうしろに來ているから会って來い、歩哨に見つかるとよ」とのことだった。「ハイ有難うございます」。

班長の許可を得ると馬小屋へ一目散、暗闇の中、鉄条網越しに姉と二人のシルエットが見えた。歩哨がないのを確かめると、小声で「ヨイ」と声